

## プログラムノート

H=A. シュタム：ケルティック・プレジャー

LDTでは昨年に続き2度目の登場となるドイツ、ヴィルトゥオーゾオルガニス、Youtubeでの積極的な活動でオルガン奏者のレパートリーばかりでなく、様々な編成の作品を次々と展開していく事でオルガンとの室内楽というレパートリーの幅を間違いなく広げたとと言えるだろう。冒頭から独自のケルティックティストな華々しいオルガンソロで始まりトランペットが花を添えるような曲想は、本人から承諾こそ得ていないものの（笑）、もはやLDTメンバーである石丸由佳のりゅうとぴあ第4代専属オルガニスト就任、ココペリ・オルガンスタジオオープンを記念してご来場の皆様と祝うべく！選択された1曲である。

J.ラター：オール・シングス・ブライト・アンド・ビューティフル

ラターは1981年に自身の活動基盤としてケンブリッジ・シンガーズを創設し、既に多くの録音が残されている。その作風は特にアメリカでは愛されており、新しい宗教音楽のスタイルを構築したと言っても過言ではないだろう。タイトルの"All Things Bright and Beautiful"（全ては美しく輝き）はイギリス聖公会の賛美歌であるが、他の多くのキリスト教宗派でも歌われている。歌詞はセシル・フランシス・アレキサンダーによるものであるのだが、歌詞の後半に“God made them high and lowly, And ordered their estate”（神は高き者と低き者を作りその階級を決めた）という、まるで神様が階級社会を作ったような響きのこの一節は今では省略されて、歌われる事はないというのだが、ラターの代表作品の一曲と言える程の名曲である。

J.S.バッハ：トッカータとフーガニ短調

誰もが知っているトッカータとフーガニ短調の冒頭部分。あのショッキングな旋律を3回繰り返した後にペダルで低いレの音が踏み鳴らされ、それを持続したまま手鍵盤で減七の和音構成音を下から順に重ねていく。その立ちこめた暗雲の隙間から光が差すように明るい長三和音が現る…。ここまでの冒頭3小節で既に壮大なドラマが描かれる。トッカータとは、イタリア語のtoccare「触れる」を語源とした曲の形式で、演奏家がオルガンやチェンバロの前に座って指慣らしのためにはばらばらと鍵盤を触って即興演奏をする、そんなイメージなのだが、それに対してフーガはラテン語のfuga「逃走・追走」から来る語で、テーマを厳格に模倣してゆく高度な作曲技法で、このニ短調ではフーガの後に再び自由な部分が現れ、曲全体が劇的にまとめられている。

J.J. ムーレ：交響組曲第2番

ムーレのロンドといえばブラスプレイヤーなら一度ならず何度も演奏する機会のある、所謂“定番作品”であるが、残念ながら今日に至っては他の作品が演奏される事は殆どない。劇作品を中心に多くの作品を残しているのだが、ライバルであったラモーに対する嫉妬で苦しんだとも言われている。ロンドが入っている組曲1番はトランペットの為の作品なのに対し、本日演奏する交響組曲第2番は2本のホルン・ダ・カッチャの為の作品であり、LDT初の2本のホルン・ダ・カッチャのお披露目となる。

J.アラン：幻想曲 第1番

ヴィドールの孫弟子にあたり、オルガニスト一族の俊英として囑望されていた存在だったジャン・アラン(1911~40)、父アルベールも著名なオルガニスト作曲家・オルガン製作者として知られ、

息子より長く活躍したのであるが、その教えをうけてオルガンを始めたジャンもまた、優れた楽才の持ち主だった。ドビュッシーやサティ、プーランクといったフランス作曲界の新しい潮流、はたまた博覧会で接したモロッコやインドの音楽からの影響など、多くの刺激をとりこみ、豊かなハーモニーや斬新なセンスに富んだ歌曲・ピアノ曲・室内楽など、若き日の10年間だけで120もの作品を残している。楽器の可能性を知り尽くしたオルガン作品の数々にも、アランの天才は結晶のように燦めいていて、弟オリヴィエに献呈されたこの〈幻想曲〉第1番(1933年)は、拍子にとらわれない自由なリズムで繰り広げられてゆく、想像の音宇宙が妖しくも美しい傑作。

#### G.ビゼー/編曲 霧生貴之：カルメンファンタジー

カルメンファンタジーと言えば、サラサーテ、ワックスマンなどが書いたヴァイオリンの作品が最もポピュラーであるが、「ハイフェッツ・オブ・トランペット」と称されていたメキシコのヴィルトゥオーゾ、ラファエル・メンデスのレパートリーとして有名になったヘイジェ・カティの作曲家、イエネ・フバイもヴァイオリンの為の同タイトルの作品を残している。今回のカルメンファンタジーLDT版は、ドナルド・ハンスバーガー編曲で夫婦でノースウェスタン大学教授のバーバラ・バトラー氏とチャーリー・ゲイヤー氏の為に書かれた版をベースにワックスマンやフバイからもインスピレーション受け、敢えてハバネラを入れずに3幕のカード占いのシーンを挿入している。カルメン、ドン・ホセ、ミカエラ、エスカミーリオの魅力は勿論だが、プレリュードやアンサンブル曲の巧みさ、いったいどこを削ることが出来るのだ？というビゼーの最高傑作をLDTの持ち味を最大限に活かして書かれたスペシャルバージョン、どうぞお楽しみ下さい。